

昭和^{戦前}傑作落語全集

戦前
傑作落語全集

第六卷

講談社

昭和戦前傑作落語全集 第六卷

定価 一六〇〇円

昭和五十七年四月二十日 第一刷発行

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一

郵便番号 一一二 振替 東京八―三九三〇

電話 東京(〇三)九四五 一一二一(大代表)

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

◎講談社一九八二年

* 落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り
ください。送料小社負担にてお取替えます。

ISBN 4-06-144526-X (文芸)

昭和戰前傑作落語全集 第六卷 目次

牛ほめ	柳家権太楼	5
天災	五代目 三升家小勝	21
厩 ^{うまや} 火事	五代目 柳亭 左楽	37
三軒長屋	四代目 柳家小さん	53
借金長屋	柳家金語楼	77
人情ぐるま	柳家金語楼	92
本堂建立	八代目 桂 文治	105
犬の御難	五代目 古今亭志ん生	117
取次電話	三代目 三遊亭金馬	130
猫の皿	五代目 古今亭志ん生	143
一万円貰ったら	五代目 古今亭志ん生	151
薬 ^や 罐 ^{かん} なめ	三代目 三遊亭金馬	159

鯉のぼり……………五代目 古今亭志ん生 170

八坊主……………柳家金語楼 185

満員電車……………柳家権太楼 197

電報の子……………柳家金語楼 209

ないものねだり……………桂 小文治 224

○ 反対夫婦……………柳家権太楼 243

百年目……………五代目 古今亭志ん生 255

そば清……………五代目 古今亭志ん生 272

二階貸します……………柳家金語楼 282

女優志願……………柳家金語楼 294

老稚園ろうぢ えん……………三代目 桂 米 丸 309

箱根山……………(五代目 古今亭今輔) 柳家金語楼 318

隣組の猫……………五代目 古今亭志ん生 335

淀五郎……………五代目 古今亭志ん生 348

長屋の孝行……………五代目 古今亭志ん生 365

猫久……………七代目 三笑亭可楽 378

^{つきや}搗屋幸兵衛……………五代目 古今亭志ん生 393

解説……………矢野 誠 一 409

装幀・及部克人

牛ほめ

柳家権太楼

人をほめて愉快にさせることはけっこうなことでございます。

「ほんとにあなたは、何時いつ見てもおきれいですこと、それに日本髪かみゆいの似合うこと、どこの髪結かみゆいさんで結むすっていらっしたんですか。新橋ですか、道理で粋いきな恰好かっこうですこと。着物の着方きりかたといい、帯の締め方きりかたといい、第一着物の柄から、帯の柄の見立て方がお上手ですわネ。本当に女でもフラ／＼するような着附きつけですワ、それであなたの顔がなければなおいいんですけれど……」

これはあまりお世辞もひど過ぎますが。

うっかり心にもないお世辞をいってしまって、とんでもないことをしたということがよくあります。

5 牛ほめ

「明日あした久しぶりの日曜だ。君はどこかへ又ノソ／＼歩くんだろう。たまにや奥おくさんを伴たづなれて、僕

の家に遊びに来いよ。二人連れでね、御馳走するぞ」

「そうかい、それじゃ明日、家内と訪ねて行くから、御馳走してくれ」

家へ帰って、さア大変だ、とんでもないことをいっちゃった、と思ったが、

「実はね、会社の山下のやつね、うっかり僕が奥さんと遊びに来いといっちゃったんだよ。御馳走するからって。まさか来るとはいわないと思ったからね。そしたら、じゃ行くから御馳走してくれてんだがね、仕方がないから何か御馳走をしてくれよ。ビールの用意でもして、南京蕎麦でも取っときやいだろう」

奥さんもいそ／＼仕度して待っております。

「来ないなア、もう時間が来ているんだがな。こゝらはちょっと道が分らないんだよ。電車の停留場まで見に行つてやろう。マゴ／＼していると可哀そうだから」

御夫婦で深切に捜しに出掛けた。入れ替りに友達がやって来ました。

「おい、来たぞ、来いっていうから御馳走を食べに来たぞ。オヤ留守らしいな、……履物がないよ、はゝア、開けっ放しで、ちゃんと仕度がしてあるようだな、ビールなど用意してあつて……はゝア、わかったよ、僕達が、時間が遅れているので、きつと道がよく分らないと思つて、捜しに行つたらしいなあ。よし、どこかへ隠れて、帰つて来たら脅かしてやろう、その履物をどこかに隠して、二人で戸棚へ隠れていよう」

戸棚へお友達御夫婦が隠れたとたんに、

「いくら捜してもいないなア、もう時間がこんなに違ってるから、来ないらしいよ」

と、捜しに行った二人が帰って来ました。

「ア、来ないらしいよ。ウン来ないのが当り前だよ。あいつが僕の所に御馳走に来る理由はない。あいつに僕は一遍^{へん}だって御馳走になったことはなしさ、こっちはたゞ言葉のついででいっちゃっただけの話だから。もしあいつが今日訪ねて来るようなら、もうあんなやつは交際^{つきあ}わないつもりだよ。ウン、来ない方がえらいよ。といって仕度はしてしまつたし、久しぶりだ、お前とこゝで酒盛をしようよ、しめたな」

これを聞いて、戸棚に隠れておりました友達の御夫婦は、ちょいと出にくくなりました。責任を感じて、戸棚の内で自殺をしたそうでございますが、マサカそれ程、責任を感じることありません。

頭の使い方というものはなか／＼難しいもので、もっともこれは利口な方と、利口でない方では、いろ／＼その形も変わっておりますが。

「おい、漬^{はな}をかみなさいよ、漬を。汚いな、漬をかむんだよ」

「ア、」

7 牛ほめ
「坐りなさい」

「ア、」

「お前のことをネ、近所で何ていつてるか知ってるか」

「ア、」

「何だい、ア、ア、て烏が子を捕られるような声を出すんじゃないよ。近所じゃお前のことを、名前を呼ぶ者はないぞ、ノールスだとか、低能だとか」

「うん」

「天保銭だとかいつてるのを知ってるか」

「うん、皆みんなそんなことをいつて、あたいのことをほめてる」

「ほめてるんじゃないよ、しょうがないもんだ。だいたい、お前は生れつき利口な子だった。小学校を出るトタンに、感かぜ冒がこじれて、病気のために脳を患わづらってから、こういう風になっちゃった。馬鹿だ／＼といわれている本人は、それ程でもないだろうが、現在の親の私は、なか／＼辛つらいよ」

「それは重々お察しする」

「何なアにをいつてるんだ。親戚の、お前の伯父おじさんの佐兵衛さへえさんだ、あの伯父さんはお前のことを何といつてる。お前のことを名前を呼んだことがない。馬鹿どうしたと、二言目ふたことめには馬鹿どうしただ。もっともあの伯父さんは偉い。若い時から苦勞をして、財産をこしらえて、こないだ立

派な家を建てた。阿父さんは、こないだ見て来て驚いた。今日はな、お前を馬鹿だ／＼といわれているから、たまには偉いなアといわしてやりたい。今日、だから伯父さんの所へ行つて、吃驚させるんだよ」

「ア、爆弾か何か投り込むか」

「そんなことで吃驚させるんじゃないよ」

「じゃ出刃庖丁を持って暴れ込むか」

「何をいつてるんだ、家をほめに行くんだ。行つたらばチャンと挨拶をするんだよ。いいかい、

今日はいいいお天気でございます、せんだつては阿父さんが上がりまして、おやかましゅうございました、今日は家を見せて戴きに参りました、それだけのことを言やア、伯父さんは吃驚する、

まア／＼お上がり、とこういう。上がったらばだよ、普請は総体檜木造りでございまして、こ

ういうんだ。檜木ばかりは使っていないが、そういつてほめる。天井を見たらば、天井は薩摩の鶉

空でございます、左右の壁は砂摺りでございます、それから庭を見て、庭は総体御影石造りでご

ざいます、御影石ばかり使っていないが、そういうんだ。そうすると伯父さんが吃驚するよ」

「そうかい、伯父さんも吃驚するか知れないが、あたいの方が吃驚するよ」

「何でお前が吃驚するんだ」

「そんなにたくさん一時にいうのは、大概驚くよ」

「情けないやつだなア、じゃ仕方がない。口写^{くちやう}しで教えてやろう」
 「口写しは汚いよ」

「汚いよて、お前の口を舐^なめるんじゃないよ。私がいう通りを、お前がいうんだ。いいかい、普請は総体檜木造りでございますな」

「普請は総体へノキ造りでございますな」

「へノキじゃないよ、檜木だ。天井は薩摩の鶉^{うずらもく}全でございます」

「はゝゝゝこれはおかしいや」

「おかしがつてないでいうんだよ」

「天井は薩摩芋と鶉^{うずら}豆でございます」

「何^なアにをいつてゐるんだ、鶉^{うずら}豆ていうやつがあるか」

「じゃ隠元豆でございます」

「豆ばかり並べるんじゃないよ。天井は薩摩の鶉^{うずら}全」

「天井は薩摩のもぐらもち」

「もぐらもちじゃない、鶉^{うずら}全」

「鶉^{うずら}全」

「そらだ〜」

「そうだく」

「そんなことを真似しなくたっていい、左右の壁は砂摺りでございます」

「佐兵衛の嬪は引摺りでございます」

「そんなことをいうと伯父さんが怒るよ。エ、左右の壁は砂摺りでございます」

「左右の壁は砂摺りでございます」

「畳は備後の五分縁でございます」

「畳は貧乏でボロくでございます」

「よくお前は変な風に間違うな、畳は備後の五分縁だ。庭は総体御影造りでございます」

「庭は総体、見掛け倒しでございます」

「しようなない野郎だなア、御影造りでございます、分ったか」

「よく分らない」

「どこのところがよく分らない」

「初めの方がよく分らない」

「真ん中の方から分ったのか」

「真ん中の方ははっきりしていない」

「じゃおしまいの方は」

「まるっきりだめだ」

「じゃ皆^{みんな}分らねんじゃないか、仕方がないな、紙に書いてやろう。有り難いことにお前は学校に行っていたから、仮名が読める。さアこれに書いてやる、いいかい。これを見ながらやっても構^{かま}わない。一番おしまい、台所の柱に大きな節穴がある。これは何か大工さんが建築の都合で、こうなってしまったんだ。佐兵衛伯父さんはこれを非常に気にしている。それで、伯父さんこの穴は気にすることはありません、秋葉様のお札を貼^はりなさい、という、伯父さんは苦勞人だ、すぐ分る。秋葉蓬菜^{ひよせ}という、火伏^{ひふせ}の神様だ。だから秋葉様の札を貼れば、穴が隠れて火の用心になるということを感じる。あゝ偉いな、子供に浅瀬^{うしかい}だ、なか／＼お前は利口になったなアというて、まず御褒美^{ごほうひ}だというて、お小遣^{こづかい}をくれる」

「幾^{いく}らくれる」

「幾らとまア分らないが、相手がお前だから、五十銭もくれるかなア」

「もしくれなかったらお前が立替えるか」

「何をいつてるんだ、親を捕まえてお前というやつがあるか。それだからお前は馬鹿だというんだ。いいか、うまくいっておいでよ」

「今日は／＼、佐兵衛いるかね。佐兵衛、オイ佐兵衛、いたら出て来い」

「あれ、誰だい。玄関でもって佐兵衛々々といっているのは。はゝア、横町の馬鹿だな。仕方

がないやつだ。オイ／＼そんな所で伯父さん呼びつけにするやつがあるか」

「伯父さん、今日は、いいお天気でございますな」

「オヤ、今日はどうかしているな。挨拶が出来るね」

「こないだは阿父^{おとう}さんが上がりまして、おやかま……おやかま……」

「何をいつてるんだ」

「おやかましゅうございましたと」

「はゝ、なるほど、感心だな」

「今日は家^{うち}を見せて貰います」

「あ、そうか。家^{うち}を見に来たのか、上がっておくれ」

「これから家^{うち}をほめるから覚悟しろ」

「何だい、そんな事に、覚悟も糞もないよ」

「伯父さん、向うを向いておくれ、都合がいろ／＼あるんだから」

「厄介^{やっかい}だな」

「普請は総体へノキ……いや、檜木造りで……ご……ざ……い……ま……すな。てんじ……よ……」

……う……天井は、薩摩芋、じゃない、馬鈴薯^{じゃがいも}じゃない、里芋、じゃない。薩摩の鶉豆……鶉全で

ございますな。佐兵衛の嬪^{かみあ}は……」

「何だい」

「いや、左右のか……べは、す……な……ずりで……ご……さい……ま……すな。たた……たた
みたたいて……昼は、貧乏じゃない、備後の……五……分……縁でこ……さい……ま……すな。
庭は……そ……う……たい、み……かげ……倒しじゃないや、みかげ……づ……御影造りでござ
いますな」

「おい与太郎や、それではお前、庭は見えないよ。縁側に出なければ庭は見えない」

「あアそうか、庭は、そう……たい、御影造りでございますなと、どうだ伯父さん」

「は、驚いた、変なほめ方をしているが、なか／＼感心だな。お前の智慧じゃないだらうけれ
ども偉い」

「それから伯父さん吃驚^{びっくり}することがある、これからがお金儲^{かねもち}けだ」

「何だい」

「イヤ、どこかに穴があるでしょう、台所に」

「ウン、柱の節穴かい、イヤあればどうも大工さんが何かの都合で、ちょうど目立つ所へ出てし
まって、気にしているよ」

「そんな穴は気にすることはありません。穴に秋葉様のお札をお貼りなさい。穴が隠れて火の用
心になります」